

第73回日本皮膚科学会西部支部 学術大会を開催して

(2021年10月30・31日)

※宮崎市コンベンションセンターとWeb配信のハイブリッド開催

天野 正宏

宮崎大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学分野教授

はじめに

第73回日本皮膚科学会西部支部学術大会を2021年10月30・31日、宮崎市コンベンションセンターを会場に開催いたしました。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対して発令された宮崎県独自の「緊急事態宣言」、そして宮崎市に適用された「まん延防止等重点措置」が9月30日をもって解除されたので、感染者の増加が危惧されましたが、予想に反し10月21日から新規感染者が宮崎県では確認されませんでした。このような状況下で開催された大会は招宴会や懇親会は中止とし、感染状況も鑑みてハイブリッド開催となりましたが、現地参加者が約300名、学会登録者が総勢約1,000名と大盛況のもとに閉会いたしました。

同大会は1982年11月に会長・井上勝平教授(当時)、第34回日本皮膚科学会西部支部総会・学術大会として初めて宮崎で開催されました。その後、2007年10月に会長・瀬戸山充教授(当時)のもとに第59回日本皮膚科学会西部支部学術大会として開催され、今回は14年ぶり3回目の開催となりました。

テーマ

宮崎大学が掲げているスローガンが「世界を視野に地域から始めよう」であります。本大会ではこのキャッチコピーをお借りして、学会テーマを「世界を視野に地域から始める皮膚科学」といたしました。地域での診療や地域から始まる研究を大切に、この学会を契機にここ宮崎から世界へ何か発信できたものと考えております。また本大会ホーム



図1 学会ホームページ



図2 学会のロゴマーク

実際のロゴマーク(左)、会長を前面に出したロゴマークは即、「ボツ」になりました(右)。

ページの写真と抄録集の表紙絵がとてもインパクトがあるとお褒めのお言葉をいただきました(図1)。私たち医局員が宮崎市の南に位置する日南市の公園「サンメッセ日南」で撮影したものです。7体のモアイ像が日南海岸(太平洋)をバックに立ち、その眼が「世界を視野に」凝視しているようにもみえます。今回、本大会のロゴマークを自前で作成いたしました

(図2). 宮崎県は“日本のひなた”といわれ、それを象徴する太陽、そして有名な観光地である青島、鬼の洗濯板と宮崎県の木であるフェニックスを背景として、中央で神楽が舞います。

プログラム

本大会では特別講演を帝京大学特任教授の杉本真樹先生に、医療現場におけるVR(virtual reality: 仮想現実)/AR(augmented reality: 拡張現実)の世界についてお話いただきました。VRによる外科手術ナビゲータや人体解剖教育などは、皮膚外科を実践している皮膚科医に、今後、大いに役立つものと考えています。また招待講演では米国マイアミ大学皮膚科のマリア・ミテヴァ准教授に、脱毛症の皮膚病理組織学的な鑑別点を中心にご講演いただきました。シンポジウムでは、以下、宮崎ならではのテーマを用意いたしました。まず「HTLV-1とATLL」では、ウイルス(HTLV-1)から成人T細胞白血病/リンパ腫(ATLL)への発症機構、そしてATLLやHTLV-1キャリアの皮膚病変までディスカッションしていただきました。宮崎県は高齢化

率が30%と全国よりも10年早く高齢化が進行している状況です。実際、宮崎で地域医療を担っている先生方を中心に「高齢化社会と地域医療」について大いに語っていただきました。また「動画で学ぶ皮膚悪性腫瘍手術のポイント」では、とくに若手の先生方に動画をみながら、外科的基本手技を学んでいただき、今後、皮膚外科を目指す契機になったと思われます。教育講演では「第4の公害病 土呂久慢性砒素中毒症」「皮膚免疫疾患における樹状細胞の関わり」「がんゲノム医療;ゲノム検査の今後の展望」などをテーマに第一線の先生方に基本からご講演いただきました。

おわりに

大会終了後、参加された多くの先生方から「学会面白かったよ」「学会の成功おめでとう」とお褒めのお言葉をいただきました。宮崎大学皮膚科スタッフ一同、万全な感染症対策を行いながら、心のこもったおもてなしができたと本当に安堵しております(図3)。

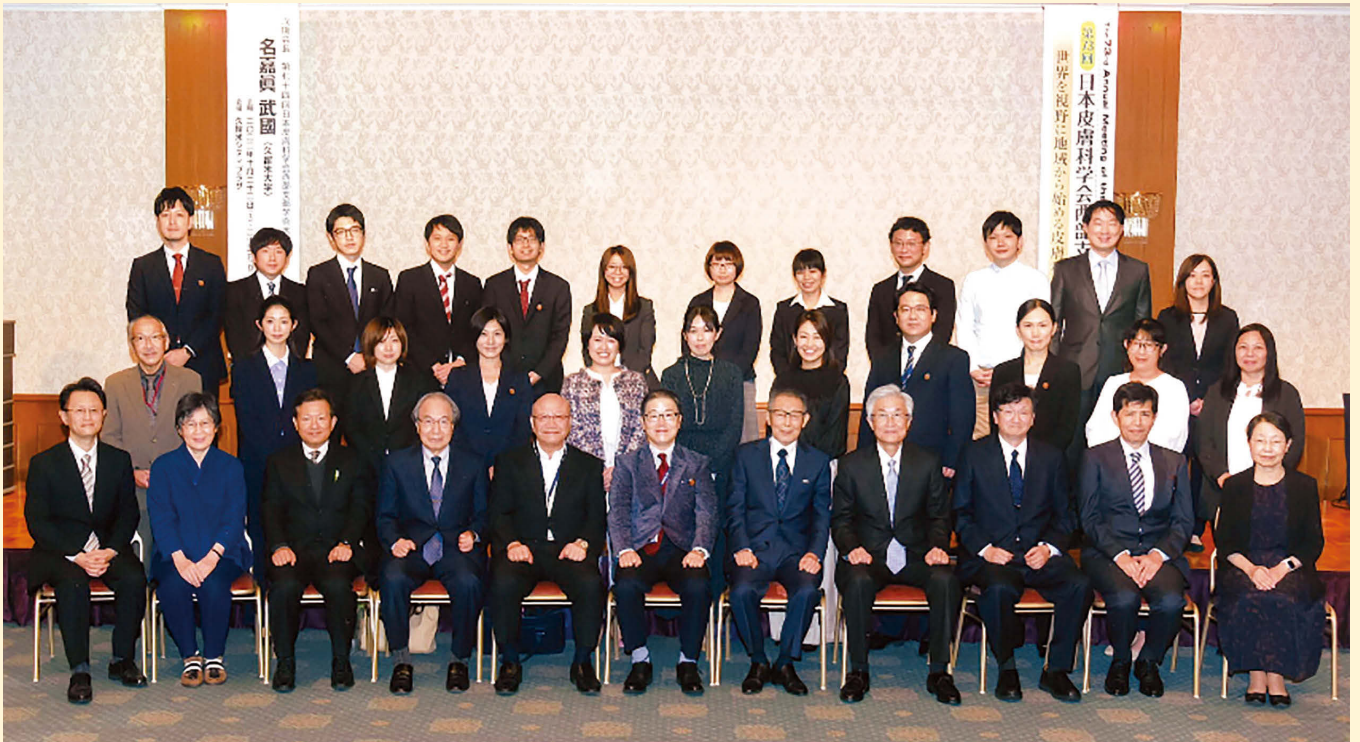


図3 閉会式後の集合写真
学会運営スタッフおよび宮崎大学皮膚科同門会の先生方と